

当院職員のスモンに関する認識度調査

坂井 研一 (国立病院機構南岡山医療センター脳神経内科)
麓 直浩 (国立病院機構南岡山医療センター脳神経内科)
河合 元子 (国立病院機構南岡山医療センター臨床研究部)
川端 宏樹 (国立病院機構南岡山医療センター地域医療連携室)
田邊 康之 (国立病院機構南岡山医療センター脳神経内科)

研究要旨

南岡山医療センターにおける職員のスモンに関する認識度について、アンケート調査を通じて調査した。

A. 研究目的

岡山県は、スモン患者数が多い地域として知られている。一方、スモンに関する社会的認知度は歳月の経過と共に低くなりつつあり、岡山県も例外ではないと思われる。今回は、当院職員を対象としたアンケートを通じ、医療従事者におけるスモンの認知度を調査するのが目的である。

B. 研究方法

当院職員にスモンに関連したアンケートを2018年11月から12月にかけて行い、その集計データを解析した。対象職員は、看護師・療養介助員・作業療法士・理学療法士・言語療法士である。アンケートの内容は、鈴鹿病院久留らの先行研究¹⁾を参考とした。(設問1) 回答者の職種。(設問2) スモンという病気の名前を知っているか。(設問3) どこで知ったか。(設問4) 原因を知っているか(5択から選ぶ a 薬の副作用・薬害、b ウイルス感染症、c 遺伝子変異、d 血管障害、e 原因不明)。(設問5) 関連語句はどれか(4択から選ぶ a HTLV-1、b キノホルム、c アンドロゲン受容体遺伝子、d 有機水銀)。(設問6) 症状を知っているか(5択から選ぶ a 視力障害・聴力障害・認知機能障害、b 聴力障害・認知機能障害・歩行障害、c 認知機能障害・歩行障害・異常感覚・しびれ感、d 視力障害・歩行障害・異常感覚・しびれ感)。(設問7) 正

誤問題 スモン患者には女性の割合が高い、ほぼ日本特有の疾患である、現在、年間20人前後が発症している、スモンは難病に指定されている、スモン患者の検診は定期的に行われている、現在のスモン患者の平均年齢は20歳である。(設問8) スモン患者の担当経験はあるか。(設問9) 担当経験がある人は、気付いたことを述べてほしい。上記の内容で施行した。

(倫理面への配慮)

本研究では、患者個人の情報については無記名で行い、集積データとして扱う。個人にかかわる情報漏出の可能性は低いものと考えられる。

C. 研究結果

職員232名から回答が得られた。職種の内訳(図1)は看護師(171名)および看護助手(5名)、療養介助員(20名)、作業療法士(9名)、理学療法士(11名)、言語療法士(3名)、病棟クラーク(2名)、職種不明(11名)。

スモンという病気の名前を知っているか(図2)については、「知っている」と答えたのは155名(66.8%)であった。その職種内訳は看護師120名(同職の70.2%)、療養介助員7名(同職の35%)、リハビリテーション関係者19名(同職の82.6%)、看護助手2名(同職の40%)、病棟クラーク1名(同職の50%)、職

症状に関する質問（図5）では、病名を知っていた155名のうちで正しい症状を選択したのは109名（70.3%）であった。職種内訳は看護師87名、リハビリテーション関係者15名、療養介助員3名、看護助手1名、病棟クラーク1名、職種不明2名である。

正誤問題（図6）では、スモン患者に女性の割合が高いことを知っていたのは82名（看護師66名、リハビリテーション関係者10名、療養介助員2名、看護助手1名、病棟クラーク1名、職種不明2名）、日本特有の疾患であることを知っていたのは68名（看護師56名、リハビリテーション関係者8名、看護助手1名、病棟クラーク1名、職種不明2名）、新規発症は見られなくなっていることを知っていたのは97名（看護師80名、リハビリテーション関係者11名、療養介助員2名、看護助手1名、病棟クラーク1名、職種不明2名）、難病に指定されていることを知っていたのは126名（看護師105名、リハビリテーション関係者14名、療養介助員3名、看護助手1名、病棟クラーク1名、職種不明2名）、定期的に検診が行われているのを知っていたのは88名（看護師69名、リハビリテーション関係者12名、療養介助員3名、看護助手1名、病棟クラーク1名、職種不明2名）、平均年齢が高いことを知っていたのは130名であった（看護師105名、リハビリテーション関係者16名、療養介助員5名、病棟クラーク1名、職種不明3名）。

スモン患者を担当した経験があるかという質問（図7）では、担当した経験があるのは32名であった。職種内訳は看護師26名、リハビリテーション関係者4名、療養介助員1名、職種不明1名である。

担当経験がある職員の感想には、「薬剤のせいで発症し、人生に悲観的な発言が所々に聞かれた。障害を受け入れて、工夫しながら生活されていた。」（理学療法士）、「異常感覚がどの程度整合性があるのか、精神心理的側面の影響がどの程度あるのか分からなかった。」（作業療法士）、「歩行障害と四肢のしびれ感があった。スモンについて話を聞くことができた。」（作業療法士）、「優しい、かわいいおばあちゃんでした。」（看護師）、「Nsより腹の不調があれば報告するように言われていました。」（療養介助員）といったものがあった。他に、高齢化に伴う合併症の出現もありどこまでがスモンの

症状でどこからが加齢由来か判然としなかったという意見も複数存在した。

D. 考察

回答があった当院職員のうちスモンという病名を知っていたのは全体の約3分の2であった。他の同様の調査¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾と同様に、残念ながら当院でもスモンに関する認識は十分ではなかった。一方、学生時代の授業や啓発ポスターでスモンについて知った事例も見られ、教育や啓発が対策として有用であると考えられた。

症状に関する認知度や、スモン患者担当経験を有する職員の感想からは、患者の高齢化に伴い合併症が出現した事が、何がスモン由来の症状か判別を困難にしているとも推定される。

なお、今回の調査を契機に辞書で勉強したという回答もあり、この調査がスモンの認識向上のため役立っている可能性も示唆された。

E. 結論

当院職員を対象に、スモンに関する医療従事者における認知度を調査した。その結果、スモンという病名を知っている職員は全体の約3分の2であり、医療従事者の間でもスモンに対する認識が十分でない可能性が示唆された。また高齢化に伴う合併症の出現が、スモン由来の症状を把握するのを困難にしている側面も覗えた。一方で啓発ポスターを契機に知ったという声も一定数あり、スモンの原因や症状なども含めた啓発が有用であると考えられる。

G. 研究発表

1. 論文発表：なし
2. 学会発表：なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) 久留聡, 村山晴香, 篠原麻綾, 横山尚子, 竹村真紀, 柏本愛, 山内慎吾, 小長谷正明: 当院職員・実習医学生のスモンに関する認知度調査 スモンに関

する調査研究．平成 24 年度総括・分担研究報告書
P 235-238, 2012

- 2) 小西哲朗, 大庭真理, 岡本博志, 門脇喜世子, 栗栖梨紗, 寺田菊枝: スモン検診実施病院における看護師のスモンについての意識調査～アンケート調査からみる今後の課題～ スモンに関する調査研究．平成 22 年度度総括・分担研究報告書 P 188-191, 2010
- 3) 犬塚貴, 田中優司, 保住功, 木村暁夫, 林祐一: 医療系学生を対象としたスモンに関するアンケート調査 スモンに関する調査研究．平成 22 年度度総括・分担研究報告書 P192-193, 2010
- 4) 小池亮子, 松原奈江, 野水伸子, 毛原のり子: 看護・介護専門職を対象としたスモンに関するアンケート調査 スモンに関する調査研究．平成 23 年度度総括・分担研究報告書 P 221-223, 2011
- 5) 齋藤由扶子: 東名古屋病院におけるスモンに関する勉強会とアンケート調査 スモンに関する調査研究．平成 23 年度度総括・分担研究報告書 P 224-225, 2011
- 6) 尾方克久, 鈴木幹也, 川井充: 在宅医療・療養支援職を対象としたスモンに関するアンケート調査 スモンに関する調査研究．平成 21 年度度総括・分担研究報告書 P 186-188, 2009